

お薬のしおり

麻疹（はしか）とワクチン No.68 (H19.5)

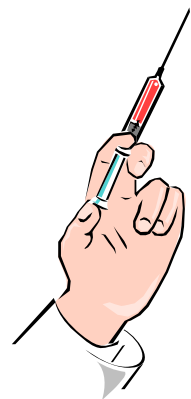
東京医科大学病院 薬剤部

今年のはしかの流行は、28万人が感染した2001年以来の大流行になりそうだと国立感染症研究所が警告しています。

麻疹とは麻疹ウイルスによっておこる急性熱性の感染症であり、感染してから10～12日後に発症します。初めは、38℃前後の熱、咳、くしゃみ、鼻水、結膜炎などの症状が出て、その後いったん熱は下がりますが、再び39～40℃の高熱がでて、それと共に、全身性の発疹が表れます。また、発疹のでる2～3日前に、口の粘膜（ホップの裏側のあたり）には、コプリック斑といわれる白い斑がみられます。発疹が出た後、4～5日で熱も下がり、回復期となります。麻疹に罹ってしまうと、対症療法（症状を楽にする治療・合併症があればそれに応じた治療など）以外に特別な治療法はありません。そのため、余計にワクチンの接種による予防が大切になってきます。

ワクチンには、大きく分けて3つ、生ワクチン、不活化ワクチン、トキソイドがあります。生ワクチンとは、弱毒化した細菌やウイルスを生きたままワクチンとして接種するものです。BCGや麻疹などが含まれます。不活化ワクチンとは、細菌やウイルスの感染力を失わせるよう処理したもので、日本脳炎やインフルエンザなどがあります。トキソイドとは、細菌の産生する毒素を処理し、毒性をなくしたもので、破傷風、ジフテリアなどがあります。

麻疹ワクチンには、麻疹のみのものと、麻疹・風疹混合ワクチンがあります。定期予防接種の対象は、1期が生後12から24ヶ月未満、2期が5歳以上7歳未満で小学校就学前1年間にあたる者です。この期間に接種を受けることが大切なのはもちろんのことですが、接種を受けた人の数%の人は抗体を獲得することができなかつたり、免疫が減衰して流行時にかかってしまったりすることが報告されています。そのため、対象年齢以外の人でも未接種の場合などは任意接種と



して接種することを考える必要があります。

ただし、次の場合は接種を受けることができませんので、麻疹ワクチンの接種前に確認してください。①明らかな発熱、②重篤な急性疾患にかかっている、③接種するワクチンの成分によってショックを起こしたことがある、④妊娠しているなどが該当します。また、接種前約1ヶ月と接種後約2ヶ月は避妊する必要があります。そして、注意したいのが、別の種類の予防接種を受ける場合の接種する間隔です。生ワクチンを接種した場合、別の不活化ワクチン、生ワクチンを接種する場合は27日以上間隔を空けなくてはなりません。また、接種後は、まれではありますが、重篤なアレルギー症状が接種後30分以内に生ずることが多いため、その場でしばらく様子を見ることが大切です。また、1~2週間後に発熱や発疹などの症状がでる場合がありますが、一過性で、通常1~3日で治ります。接種当日はいつもどおりの生活でかまいませんが、はげしい運動は避けましょう。

これまで大人が麻疹に罹ることはあまり無いと考えられていましたが、最近は麻疹に罹った成人の報告例が増加しています。その理由としては、以前は生ワクチン接種の場合、免疫は終生続くと考えられていました。しかし、近年、麻疹の流行が減少して野生ウイルスに接触する機会が少ないため、麻疹ワクチン接種による免疫が低下して麻疹に罹ってしまう例（二次性ワクチン効果不全）が増えています。現在ではワクチンによる予防接種の持続期間は10年程度と考えられています。つまり、子供の頃に麻疹の予防接種をしたからといって決して安心できないということです。

予防接種を受けることで自分も周りの人もウイルスから守ることができます。注意事項を確認し、接種を受け、もし高熱やけいれんなど体調の変化が表れたときには、速やかに医師の診察を受けましょう。

